

問題意識の深化を目指す単元構成

— 現代文授業での試みと反省 —

田 中 啓 介

一 はじめに

この論稿では、七年間勤務した前任校（大阪府立堺東高等学校）での最後の一年間（一九九三年度）の実践を報告したいと思う。後述するが、この一年は多少長い見通しをもつての授業を構想し展開したつもりであった。が、私の授業を通して生徒達の意識はどれだけ深まり、考えようとする姿勢が身についたのだろうか。振り返って自らの授業を整理し、生徒の表現を紹介することでその疑問点を考察してみたい。

二 一・二年の授業の流れから考えたこと

一九九一年度入学生生の担任として二年間持ち上がり、三年生を迎えようとする春休みに、それまでの自分の授業を省みて、その問題点を次のように整理した。

① 一年間の長期的な見通しの上で授業構想を練ること

ができなかつたため、「どういふ問題意識をもたせるか」「どういふ力をつけるか」という具体的なことが、こちらにも生徒にも曖昧なままであった。

② 少々難しい読解はできても、基礎的事項である漢字・語彙の力が身についてないという生徒が少なくない（矛盾するようだが確かにこういふ一側面がある）。その手だてを十分に講ずることのできないまま、三年生を迎えてしまった。

③ 生徒に主体的な取り組みを求め、その成果を形に残す授業（例えば、一年現代文でのカレンダー作り、一年漢文での『論語』レポート、二年現代文での短歌俳句の解説集作り、二年漢文での『史記』グループ発表などが挙げられる。）は、その取り組み方や完成した資料冊子をみても一応の効果あげている。自分たちが取り組んだ実感を得られる授業は、やはり大きい意味をもつ。説明・発問を主とした一斉授業の形態から脱する方向を検討していく必要がある。

三年生の授業では、希望して現代文(四単位×四クラス)をもつことにした。一つは、以前三年生を担任したときの現代文授業での収穫と課題を生かして再挑戦したいという思いからであり、二つ目には、一・二年での文章表現から発展して、三年生でどこまで自分の考えを深化させることができるかを見定めたいと思ったからである。それ以外にも、古典ではどうしても言語事項に縛られる部分が大きく、文章から思索へ発展することが難しいように感じていたのも否めない。

さて、前述した一・二年生時の反省をふまえ、以前の三年生での経験も含みあわせて、現代文授業の見通し・計画の概要を次のように立てた。

① 単元ごとの主題を明確にする。

定期テストまでを一つの期間と設定し、生徒の実態に即したさまざまな問題意識を触発できるようなテーマ設定をした上で、それに適うと思われる教材を選定する。

② 帯単元も作る

週に四単位では授業進度が早いこともあって、週に一回くらいの割合で言語的な基礎事項の演習をする。先に述べた基礎力の不足を補う意味と、受験対策の意味をもたせる。軌道に乗れば、卒業レポートのような作業にまでもっていききたい。

③ 冊子にして形に残す

ノート以外に学習プリント(表現の場を作ることがねらい)を準備し、参考に配った教材プリント、言語事項の演習プリントとあわせて、定期テストごとに一冊の冊子として製本する。学習の成果を形に残す意味は大きいように感じる。そして、それぞれの単元に、まとめとしてB4版三枚程度のレポートを課す。

④ 継続作業として

それまでの現代国語で大切にしてきた力、すなわち「問題意識をもって文章を読み、ものごとを自分の目でとらえられるようになる」「書くことによつて理解を深め、自分の位置を確認する」ことは、引き続き軸にしてやっていく。一年時からの「授業記録」(資料①参照)、二年時からの「表現ノート」(資料②の下参照)も授業と並行して続けたい。

三 現代文授業の実際

a 一年間の流れ

一年間全体の流れとまではいかなかったが、四月の授業開始までに大筋での流れ・具体的単元を考え、最初の授業でも生徒にも予告した。(資料②の上参照)。

さて実際の授業はどう行われたか。三年五組の授業記録をもとに一覧表にしてみると、次のようになる。(次ページの上の表参照)

一年間の授業の流れ

(教科書は第一学習社『四訂版 現代文』) ★は教科書
 教材、☆は自主教材 総授業時数は90時間

単元	主教材(時間数)	帯単元(個別授業)
1 私が存在意義って何だろうか?	★神谷美恵子「生きがいについて」(8) ☆高橋和巳「我が青年論」(7)	①語彙・漢字 ②原稿用紙の表記 ③主語・述語・修飾語
2 言葉をいろんな角度から眺めてみよう	★阿部昭「ことばありき」(3) ☆藤原審爾「超えること」無言の世界」(1) ★大岡信「春のため」(3) ☆大岡信「地名論」(2) ☆翻訳詩「勸酒」春の朝」(1) ★面とヘルソナ」(4)	④指示語・接続語 ⑤呼応表現 ⑥修辭法・敬語
3 分岐点をどう生きるか	★森鷗外「舞臺」(5) ★夏目漱石「現代日本の開化」(4)	⑦入試問題 ⑧文学史(1) ⑨文学史(2)
4 自分にとっての教育	☆新聞記事(2) ☆灰谷健次郎「母子の涙」(3) ★佐伯胖「コンピュータと教育」(3) ☆切り抜き速報「教育」4年分(3)	⑩雑談語(1) ⑪雑談語(2) ⑫四字熟語・慣用句
5 自分自身を探の旅	☆石田春夫・高史明の文章(1) ☆三善寛「もしかして」(2) ☆サン・テグジュペリ「星の王子様」(3) ☆卒業生の表現(1)	⑬四字熟語・慣用句

b それぞれの単元について

単元設定のねらい、実際の授業の進め方、授業を終えての反省を整理してみる。

・私の存在意義って何だろうか？(一学期中間まで)

三年生最初の単元であり、高校生活の最後の一年のス

タートということで、自分自身の生き方についての認識を新たにしたいとの思いで設定した。神谷美恵子の文章で述べられる「生きがい」と自分の生きがいを比べ、高橋和巳の文章からは青年期の課題について、自分の抱えている問題と重ねて読み取るように指示した。しかしテーマとして少々重く難しい問題であったため、多くの者が戸惑い、自分に引きつけて考え抜けないところもあつた。それまで解答を与えられるのを待ちながら国語の授業に臨んでいた生徒にとっては、答えの出ない問題に不安を感じている様子も伝わってきた。

・言葉をいろんな角度から眺めてみよう(一学期末まで)
 二年時、筒井康隆の『モア』や別役実の『とぜんそう』を教材にした折の手ごたえが良かったため、言葉のいろいろな側面を理解し、また言葉で遊んでみようという狙いで企画した。

阿部昭の『ことばありき』からは、我々の使っている言葉の真実と虚構に思いを致し、藤原審爾の『超えること』で言葉が生きるための条件を考え合つた(この文章は非常に好評)。大岡信の詩では言葉の作り出すイメージを歌謡曲との比較で実感し、また言葉遊びのおもしろさも味わつた。訳詩は井伏鱒二の『厄除け詩集』(勸酒)とブラウニングの『春の朝』を引用、「面とヘルソナ」は以前の三年生でも扱つたので、「面」「ヘルソナ」といった言葉に着目できれば、と思つていたが中途半端になつて

しまった。(この単元の学習プリントについては資料③参照)

・分岐点をどう生きるか(二学期中間まで)

いよいよ生徒たちにとっては卒業後の進路への入り口に立つ時期。四年前の三年生と同じく『舞姫』のグループ発表とした。主人公太田豊太郎の抱える問題をいろいろな側面から考察しつつ、自分の問題としてとらえていくことができるだろうか。四年前の授業から少しでも先へ先へ読みを深めることができるだろうか。今回は漱石の『現代日本の開化』とからめて、明治という時代、日本の近代化のもつ問題を強く意識化しよう心掛けた(前回はこれが不十分だった)。

何度やってもグループとしてのまとまりを作ること苦勞はするが、一・二年時にグループ作業の経験をもつ者も多くいて、まずまずの発表になっていた。そして、前回以上に豊太郎の問題を、現代の問題・自分たちの問題として考えようとする姿勢が強くなっていた。こちらの意図が浸透した結果と言えようか。

・自分にとつての教育(二学期末まで)

推薦入試のこの時期は、ある意味で授業の成立が難しい時期になる。この時期に、私自身が感じている教育の問題について、矛盾について彼らに投げかけてやれば、彼らもまた自分にとつて教育とは何だったかを考えることができ、それがいまの自分の置かれている位置を確認

することに成りはないか。そう考えての単元であった。

この授業のためにはタイムリーな素材がたくさんあった方がよいと思い、私が定期講読している『切り抜き速報 教育版』(二ホンミック刊)という雑誌(全国の新開から教育に関する記事を集め、半月毎に出しているもの)を教材として用いた。灰谷健次郎の『優子の涙』も訴える力は強かったが、それ以上に新聞記事の投げかける教育問題の多彩さに驚き、自分の受けてきた教育と関連づけて考える生徒が目立った。これをまとめにもと考え、各人に一つのテーマを選ばせ、記事を集めてまとめのレポートを作成させた。(記事によつて視点の違いを対比したり複数の記事を総合化するしたりすることがもつと徹底できればよかった。)生徒達の選んだテーマは、「学校五日制」「性教育」「不登校」「学習障害児問題」「NIE」……と一クラスで三十にわたるほど多様であった。(この単元の学習プリントは資料④参照)

・自分自身を探す旅(三学期学年末まで)

高校生活の区切りとして、自分自身と向き合い、自分について深く考え、自分を読み取るうという狙いで設定した。考えてみれば、それまでの単元もすべて行き着くところは自分自身であり、この単元に収束してしまうかもしれない。三善晃の『もしかして』は自分という人間の不可解な部分を鮮やかに切り取った小編ゆえに、生徒達に意外なくらい受け入れられた。『星の王子さま』は「心

で見なくちゃ、物事はよく見えないってことさ。肝心なことは、目に見えないんだよ」というキツネの台詞に焦点を絞って、自分にとって心で探さないと見えないものは何だろうか、と考えあった。最後に四年前の三年生が記した自己表現レポートを三編紹介し、自己を見つめることの意味について再確認した。さすがに自分たちと同じ立場にあった卒業生の表現の力は大きく、各自が自分を見つめて表現するきっかけとして有効に作用してくれた。

c 反省からの提言

大まかな授業の流れについて述べたが、総合して考えてみると反省点も多く、同時に留意すべき点もいくらか浮かび上がってきた。

その一、それぞれの単元が生徒の問題意識とかがみあっていたか。テーマが空回りした部分もあったのではないか。単元構成は、常にその時その時の生徒に即したものを練り上げることから生まれるのであって、あらかじめ用意されたモデルでは意味をなさない。こちらの思いの中に、「三年間のまとめだから何かをしなくては」という焦りもあったのかもしれない。

その二、生徒に多くの表現を課しながら、それらを十分に吸い上げてやれず、教室で人の意見に触れたりする機会をあまり作ってやれなかった。問題意識の深化には、級友の考えに触れつつ自分の意見を構築・再検討してい

くことが不可欠であろう。

その三、教材選定が適当であったか。第二・第四の単元では教科書教材と自主教材との関連性が薄かったのではないか。精緻な教材研究、さらには複数の教材をからめていく構想力の必要性を痛感する。

その四、冊子製本の手だてを徹底しなかったために、見苦しい製本も目立った。

その五、帯単元は十分に機能したか。否である。受験での必要性が、問題演習形式の単調さを補っただけではないか。漢字や語彙の手立ては長期的な見通しの上に立つて焦らずに取り組まねばなるまい。彼らの文章表現に接していて、そう感じる。

その六、授業の場と日常生活を重ね合わせることできたか。「表現ノート」もその一環で実施したが、彼らの表現の中には、「この授業が終わったなら、こういう問題について考えることもないかも……」というものがいくつも見られた。もともとと両者の関わりを意識化できるはずだ。

四 手ごたえと課題と —— 生徒の表現から ——

a 授業が残したもの I

前章で反省点を列挙したが、今回の実践が全くの失敗だったわけではない。収穫の一つは、長いスパンで授業

を考えていたために、ゆとりのある展開ができた（教える量に追われなかった）ことである。時には余談で授業をつぶし、時には前日の新聞記事を取り上げてみることもできた。できるものなら三年間を見通しての計画を立て、それに沿った授業展開を試みたいと思ってしまう（ただ、その場合には教師間の連携の密度が重要になるだろうが）。次に、設定した単元が答えのない問題であるため、とにかく各人が自分で答えを作ろうとする態度を身につけたことも大きい。「存在意義なんて考えたこともないで」「言葉つて考えるほどわけわからんなあ」と言いながら、自分の中から何かを絞り出そうとする姿勢がみとれた。こちらにも用意した模範解答があるわけではないので、一緒に考え込んでしまわざるを得なかった。一年間を終え、外から見ただけでわかる成果と言えるほどのものはあがっていない。が、彼らの「一年間で何を考え、何を学んだか」の表現を読むときに、決して無駄ではなかったのだな、と信じることはできるし、これからもその気持ちを持ち続けてほしいと願わずにいられない。

※以下に引用する生徒の表現については、句読点や傍線を含めた表記をほぼ原文のまま掲載している。

私にとつて、現国は楽しみでもあり、いやでもありました。自分をさがす手助けをしてくれたり、悩んでいるときは、きれいだだけじゃないか、とイライラしました。一期末と二期末は、内にたいしての学習ではなくて、外に対する学習だったと思います。（ややこしい表現やけど）だからわかりやすかったです。うわべの気持ちをつかえよかったですものでした。その中で、「面とペルソナ」が文章と考えのおもしろみが興味深かったです。「二中間・学年末は内に対する学習、自分の中へむかって目を向ける学習でした。」

先生は一生懸命熱弁していて、それはやっぱりきれいだと思っただけども、先生は他の先生や大人にない、きれいいごとでも真剣にうったえてくる、自分の考えをつかんでみんなに伝えようという意欲が、（失礼ですが）少年のようで、いつわりだけで書けるレポートに、自分の考えを表してみようという気にさせられました。私は先生を客観的に見ましたが、もしかして、先生の思わく通りにはまってしまったのかもしれませんが、でも、この多感で、物事が少しずつ自分で気づきはじめた高校生活で、先生の思わくにはまって、自分を見つめる機会ができたことは、生涯忘れないと思いますし、プリントなどはとっておいて、迷いができたときや、ちょっと大人になったとき開いてみて、高校生のおさなひ、しかし真剣な心を思い出して、わらってやろうと思います。

（5組 A）

一学期末に学んだ「ことば」について例に出すことによつて、この一年間の現代文で学びとつたことを書くかと思う。この一年、難しいことばかりを考えてきた。とても大切なことばかりだった。普段ではとても考えないことばかりだった。その考えただで、一番興味深かったこと……それは「言葉について」でした。言葉を書くというのは、どういうことなのか？という疑問から始まりました。現代文の授業を通して考えたこと……それは人間生きると、より高く成長するには、なにかテーマや目標をもち、それに合った人の考えをテレビや本で知り、良い部分はその考えに取り入れて、じっくりと考え、紙に書き表すことによつて、自分の意見というものを作り上げることが必要なのだ……ということ。その

自分の意見を作り出すときに、自分の考えていない言葉や、少しいふぶつた言葉を書いたのでは意味がない。もっと自分に正直に忠実に「ことは」を書き表すことが自分の意見を作り上げるのに必要であつて、自分自身を知り、またもう一步高いテーマにそつて考えていきながら成長していくのだと思ふ。人間が成長するに、いつも自分に語りかける言葉……客観的に自分を感ぜられる力が必要であつて、自分に忠実な言葉をもつてない人には成長がぞめないということ、一学期末の「言葉をいろんな角度から眺めてみよう」や、二学期末の「自分にとつての教育」や、三学期末の「自分自身を探す旅」を学んでいくうちに考え方が作り上げられていった。現代文の授業を通して書くことの本当の大切さを知りました。(7組 B)

b 授業が残したもの II

Cさんは私が三年時に担任した生徒である。一年・三年の二年間教室をともにした彼女は、授業に対して真摯な取り組みを見せ、特にその文章表現(授業での提出物に限らず、学習日誌の感想欄なども含める)には彼女なりのものの見方がよく表れていた。彼女の「一年間の学習の総括」から引用する。

自分について、はじめて深く考えた一年間だった。考えてみると、自分のことは、自分が一番知らないのかも知れない。授業中に、先生が私達生徒に何か質問する。「……わからん……」ということが毎時間のようにあつた。先生の質問に生徒が答える。すると「ふんふん」と先生は答え、その後、「ほくはねえ」と先生の意見を言う。すると、「ああ、そんな考え方もあつたんか。」と私の視野が少しずつ広がっていく。人の意見は聞いてみるものだとつくづく思う。

一番印象に残っている授業は、「舞姫」と「自分にとつての教育」と「星の王子さま」でした。「舞姫」を読んで、その時の私の心況

と豊太郎の心況が、なんとなく似ているように思えて、自分を見つめなおすことができて、私のすさんでいた心も、なんとなく、ほぐすことができました。「教育」については今でもいろんな疑問が残っています。これからも考えていくべき問題です。

「星の王子さま」を読んでも、それにでてくる、「のんべえ」や「あきんど」や作者が子供の頃、周りにいた大人たちや、「てんとうしゅ」や「星の数を数える人」や、「王さま」と同じような人間のような気がして、とても、あせりました。でも、そうして読むこともよつて自分を知らなけりや、自分を変えたいのに変えることもできずに、きつと一生終わってしまうでしょうね。「星の王子さま」に限らず、この一年間の現国の時間中、そう思つて、そうしようとしてきました。まだまだ目に見えた変化はありませんけどね。

そのCさんから、卒業式の一週間後に一通の手紙が届いた。五枚の用紙に綴られた、私にとつてはショツキンな文面であつた。

突然のお手紙でさぞおどろいていらつしやるでしょうね。卒業式の日に返していただいたレポート(自分にとつての教育)の返事を読みました。先生はきつと内容を忘れていらつしやるでしょうから、ここに書きます。

Mのことを悪く思いたくはないが、性格的にきつところもある、人によつては気分を害することがあるかもしれません。(でもいい子ですよ)ただ、「学校をやめた友人」のことですが、わずか一週間余り(それも入学して間もない慣れない日々)の間に本質的なじめがあつたかどうかはわかりにくいところですね。もし問題があるほどのことならば、なぜ誰も取り上げないのでしょうか?

とありました。はつきり言つて私はこれを読んで失望しました。私は3年間先生のことは尊敬していました。でも、この文章を読んで、3年間の田中啓介という先生の教師像がくずれさりました。下線の引いてあるところが、どうして誰も先生に言つたりし

なかつたのか、わかりませんか？相談したところで、どの先生も、先生のように言うにきまっているからです。

私は、そこまで書かなくても先生ならわかってくれるだろうと思つてあえてはじめの内容は書きませんでした。でも、ここまでわかつてもらえないなら書きます。――《中略》――私だつて、彼女とは親友だと思つてゐる私だつてあのレポートを書くのを本当にためらひました。「Mさんは、先生たちに好かれてゐるから、こんなことを書いたら私の印象がきつと悪くなるだろうな。」と思ひました。でも私にとつては先生に対する私の印象よりも、彼女への気持ちだったので勇氣を出して書いたんです。「こんなふう書いても啓介先生ならわかってくれるだろう。N先生ならきつと無理だけど。」とも思つたらから書いたんです。でも結局、先生も他の先生方や、大人たちと何にも変わりませんね。私には、先生からの返事が、本からでも学んだような単なるキレイごとのようしか聞こえません。

そんな先生達の中で、別になりたいした友達でもない子のためにどうして誰かが問題になつてするんですか？誰だつて自分がかわいいにきまつてる。私だつて、彼女のことだから、先生に反抗したりするけど（それもやつとの思ひで）、もしこれが、先生の単にクラスが同じというくらいの友達なら、ここまですることなんてできません。

先生は、自分がそんな人間じゃないだろうから、あんな返事を書いたのでしょうか、実際、そんな人間なんて、ごくわずかです。そんなだれ一人仲のいい子はいない中で、どうしてたつた1週間でなんて言う権利があるんですか。――《中略》――

まさか高校教師になつてまで、いじめの問題につき合わされるとは思つていませんでしたか？この手紙を読んで、先生はさぞかし腹を立ててるでしょうね。私に失望してゐるでしょうね。でも私はいけません。ただ1つお願いがあります。返事はいりません。絶対に返事は書かないでください。これ以上、先生を憎みたくありませんから。できることなら、これから一生、先生もMさんの顔も見たくありません。写真ができたので一応送りますが、やぶるなりなんなり、ご自由にしてください。それでは、さようなら。

3月1日 第20期卒業生 C

二期後半の授業レポートの「あとがき」で、彼女は自分の親友が受けたいじめについての思いを綴つた。提出されたレポートの中でも、その「あとがき」は特に私の目をひいた。しかし、結局私のコメントは彼女を傷つけ、「あんなことをレポートに書くのではなかつた」という思いを抱かせただけであつた。それはCさんの心に沿う一言ではなかつたからにほかならない。なるほど、いま自分で読み返しても思慮の浅い一言だと思ふ。なぜあの言葉しか書けなかつたか。レポートの処理に追われ、文章の一つ一つを深く吟味する姿勢に欠けていたのではないか。Cさんの手紙は多少感情的なところもあるが、私には彼女の気持ちが、痛い。

さらに……と私は想像してしまふ。もしかして、一年間の授業の中で、表面にこそ出ていなくてもそのような思いをもつた生徒が何人もいるのではなからうか。提出物にはコメントをつけようとして努力してきたつもりではあるが、それが惰性になつて「何か書いておけばよい」程度の安易なものになつてしまひ、かえつて逆効果を与えていた部分も多いのではないか。

この一年間の実践を終えた直後、正直なところ私には自負があつた。それは前節aで紹介したような生徒の表現に支えられた「自分の授業に対する自信・手ごたえ」のようなものだと言つてよい。しかし、Cさんの手紙によつてその自負は見事に砕かれてしまった。ただ、それ

は悪い意味で言うのではない。自戒と、見えなかつたものに気づかせてくれたことへの感謝を含みあわせて言っているつもりだ。こういう手紙をくれる学習者に感謝しなくてはなるまい。その指摘をこれからに生かさねばなるまい。

五 終わりに — 新しい学校で —

一九九四年度は新しい学校で三年生の授業を担当してきた。前任校のやり方では通用しない部分も、少しずつではあるが見え始めている。心の中で「様子を見ようか」という遠慮のようなものがあり、後手後手にまわつてしまったのが一番の反省点かもしれない。

前任校での失敗を生かし、またCさんの手紙から学んだこと——ひとりひとりにもっと沿う必要があるということ——を心に留め、生徒の問題意識を触発できるような授業、言葉の力を養う授業を創造していきたい。今まで以上に厳しいはずの来年度、何をしなければならぬか、何ができるのか、常に模索を続けながら、授業の力を信じて実践に励みたいと思っている。

一九九五年二月三日（大阪府立長吉高等学校）

注1 この実践は「教育実習を担当して——二つの授業の

考察——」と題して、第32回広島大学教育学部国語教育学会で発表した。

注2 同じく「漢文課題学習の取り組み——グループによる文集作成——」と題して、第33回広島大学教育学部国語教育学会で発表した。

注3 この実践は「考えを深める話し合い——『舞姫』における班学習の効果と課題——」として、『エデュカーレ第5号』（第一学習社 一九九一年）に掲載した。

注4 「自己表現から生き抜く力へ——現代文授業での試み——」と題して、第31回広島大学教育学部国語教育学会にて発表した。

たった一人の自分

5組 D

はつきり言うと、私はもう一人の自分について考えるように言われた時、すごく嫌でした。「もしかして」の自分を知らぬのがこわかったからです。普段の自分とは違う自分に気づくことは、二人人格であることに気づくのと同じに思えました。犯罪者に近いような考えたことがあったので、でも、もう一人の自分について考えることは、今思うと、自分全体について知る大切な手段なのではないか。

人間は誰でも、自分の中に汚ない部分を持っていると思います。それは、いろんな場面で顔を出すのですが、普段は自覚していません。それに自覚することを自然と拒む傾向があります。私も自分の汚ないところをたたくさん持っています。意地っ張りだし、而倒見は悪いし、怠惰だし。自分を見つめ直すと、次から次へと嫌いな面が見えてきます。だから、この機会は、自分を改善してゆくいい機会にしたいと感じました。

でも、三学期の授業を通して、私の欠点と同時に、自分の価値について考えることができました。自分の歴史は自分にしか書けない。当たり前前のことだけれど、とてもうれしくなりました。あの時、あの瞬間にこんなことをして(されて)、あんな風に感じたのは何十億という人間の中で私しかいないのだと思うと何だか自分が大切に思えました。私の人生は十八年と少し。人から見たら「まだまだ若い」と言われる年ですが、若いなりに、いろんな出来事を経験してきました。今思えば、割と小さい頃から、いろいろと考えてしまっタイプでした。人のしたことや、言ったこととの裏にあることを考えたり、人の表情から何を考えているのかを読みとることが上手です。それは、よい人もあれば、逆に裏目に出ることもありましたが、そんな性格から、良く人に気を遣ってしまっって、小さいのに、自分の素直な性格を抑えるようになっていました。

例えば、朝ごはんのことです。昔から母は、私たち子供に朝ごはんを作ってくれたことがありません。自分の記憶に残るころからずっと、自分たちで勝手に食べました。言い換えると、私たちが昔から起きて、母は眠っているのです。ドラマやCMの朝食シーンは昔からあてられて、「ママ」の焼くスクランブルエッグのにおいで目が覚めて、起きるとテーブルにはトーストとサラダと牛乳が並んでいる。考えただけでうらやましくなります。決して、朝ごはんを作るのがめんどうというわけではありません。ただ、母からの、子供に対する一つの愛情の表

われとしての朝食が食べてみたいのです。(今だに)でも、そんなことを今まで「お母さん、しんどいだろな」小さいころからです。なぜかというな)と相手に気を回していたからです。

小さくても気が利くよい子だと思われますか? 私はそう思います。また、そんな自分が好きだから、自然とそうなったのでしょうか。でも人間は無理をし続けることはできないようです。小さな我慢が積み重なって、山になって背負えなくなる時が来るのです。それは、私が高三の秋にやってきました。「自分のしたくないことは本当にしない。頭を使うことはしんどいからいや。毎日、そう感じるようになって、体を動かすことがつらくなって、眠ってはかりました。すると体もしんどくなって、病院で検査の嵐。学校も休むようになって、精神科のカウゼリングも受けました。お医者さんは言いました。「その家庭環境じゃ、そんな風に感じないようにするの無理がないね。もつと甘えもいいんだよ。」

両親の離婚、くり返される転校は、私をききわけのよい子にしてくれました。でも、自分が本当に何をしたいのか、何を求めているのかを見失わせたように思います。他の人がどう思うかにもふりまわされてしまいました。もちろん、自分のことはかり考える。自己中心的な人になりたいたいわけではありません。ただ、人生のルールを、他の人にひいてもらってばかりでは、一生満足することなどできないように感じるので。

普段の生活の中で、自分の気持ちについて、じっくり考えたり、まして、文章にするなどは、したことがありません。でも、書いてみるというのは、本当にいいことだっって、今、正直に、そう思います。書きながら、自分の気持ちがわかって、整理されてゆきます。これを書き始める前は、すごく気が重たくて、めんどうに感じていましたが、今は、何だか少し、スッキリしたようです。

卒業すると、もう誰からも現国の授業を受けることができませぬ。前までは、卒業テスト・宿題がない「うれしい」ということしか考えていませんでした。近づくと、複雑な心境になってきました。これまでのような仕方で行うんことを考える機会とは与えられなくなるでしょう。それがうれいような悲しいような気がします。これからは、自分で切り開いてゆかないといけないのですから。

私にできるでしょうか。わかりません。でも、先生の授業を通して、世の中にたった一人しかない自分に気づかされました。そのことへの感謝と自分の高校生活に対するねぎらいの気持ちは、これからの私の歩みに対する原動力となるでしょう。